

人種・民族・日本人

——戦前日本の人類学と人種概念

坂野 徹

近年では、人種概念がもたらした様々な差別の問題や、人種分類の恣意性の自覚にもなつて、本書のような批判的検討の場面を除けば、人類学者が人種という言葉を用いることは少なくなつてゐる。だが、一応は、生物学的あるいは身体的な形質による人類の分類単位を人種 (Race) と呼ぶのが、従来からの学問上の了解だと考えて間違いないだろう。日常言語での用法はともかく、しばしば人種と対比される民族が、歴史、文化などの共通性に基づく分類単位とみなされる場合が多いのに対して、^①人種が生物学 (自然科学) 的色合いの濃い概念であることは確かである。単純化をおそれずいえば、人種と民族の区別は、自然／文化人類学という学問区分と対応しており、伝統的に自然人類学は人種、文化人類学 (民族学) は民族に関わる問題を扱つてきたと考えられる。

しかし、ここで注意したいのは、日本語の人種は、当初から、現在のように生物学的含意を明確にもつ概念ではなかつたということである。しかもまた、民族という言葉が一般に使われるようになったのは明治中盤以降といわれ、したがつて、それ以前には人種と民族という使い分け自体、存在しなかつた。

そこで本稿では、人種が次第に生物学的概念と考えられるようになる (『人種概念の「生物学化」) とともに、人種と民族に関する現代的な了解が生まれてくる過程をたどりつつ、日本の人類学にとって人種概念がもつ意味について考

えることにしたい。ここで人種と民族をめぐる概念史という、一見些末な問題を取り上げるのは以下の二つの理由に基づいている。第一に、現代の人類学者のあいだには、人種と民族の誤用を批判し、正しい使い方の必要性を説く議論がときにみられるが、両者の区分がどのように形成されてきたか、いまだ明らかにされていないこと。すなわち、誤用批判は、現代の使い分けを前提に行われるが、人種と民族に関する現代的な了解の成立基盤を問うことなしに、この種の批判は本来成り立たないはずだということである。第二に、人種概念は、当然、人種(差別)主義の問題ともかかわるが、日本における人種主義の歴史を考えると、日本語の人種の意味内容の変化をふまえることも必要だと思われること。例えば、民族との区分が成立していない時代の人種をめぐる言説に、現代的な意味合いを過剰に読み込んでしまつては、人種主義の評価をも歪める可能性があるということである。

なお、ここで付言すれば、欧米語の人種(Race)に関しても、当初から生物学的概念に閉じこめられたものでなかつたという点では、日本語の人種と同様のことが指摘できる。だが、本稿の限られた紙幅のなかで欧米語の人種(Race)の歴史について触れる余裕はないし、³⁾さらに日本語の問題にしほつた場合でも、現代の人類学者のあいだでさえ意見の一致をみない人種と民族に関する多様な解釈を網羅的に検討することはできない。

そこで、ここでは、人種や民族をめぐる戦前日本の人類学者の議論と、当時の人類学における最大のテーマだつた日本人起源論との関係に焦点を当ててみたい。というのも、日本の人類学における人種/民族概念の歴史は、集団としての日本人をいかに語るかという問題と不可分だと考えられるからである。具体的には、最初に、日本における人類学研究の創始者である坪井正五郎の言説に即して、明治期の人種理解を検討し、つづいて人種と民族の区別の成立と、それが日本人起源論に及ぼした影響について考察する。そのうえで、生物学的分類単位として人種を捉える発想の重要な根拠となっている、人種は遺伝的共通性をもつ集団だという了解の形成と、それに対する優生学の影響について検討を加える。そして最後に、大東亜共榮圏構想が唱えられる一九四〇年代における人種概念と日本人起源論の変容について考えたい。

1 日本人類学の誕生と人種——坪井正五郎の人種理解をめぐって

坪井正五郎の人種観

一八八四（明治一七）年、人類学会が結成され、日本でも人類学の組織的活動が開始されるが、その中心となったのが、当時、東京大学の学生であった坪井正五郎である。坪井は、その後、大学院進学、イギリスへの留学を経て、東大理学部初の初代人類学教授に就任、一九一三（大正二）年に死去するまで、日本の人類学を組織・理論の両面でリードしつづけた。

草創期の日本人類学の指導者として、坪井は人種をめぐる問題について多くの啓蒙的な文章を発表している。例えば、一八九六（明治二九）年に発表された「人種」と題する論考で、坪井は、西欧の研究者による様々な人種分類を紹介・検討しつつ、次のように述べている。まずは、人種分類基準として、頭骨の形状といった生物学的形質だけでなく、言語も挙げられていることに注目したい。

或る論者は体格特に頭骨の形状が系図調べの最も慥かな手掛りで有ると云ひ、或る論者は言語特に文法上の組織が系図調べの最も好い探りで有るとします。頭骨の分類は頭骨の分類で宜し。「是即ち人類の分類で有る」と云ふのは境を越えた話と云はなければ成りません。言語の分類も言語の分類で宜し。「是即ち人類の分類で有る」と云ふのは同じく当を失して居る。人類は頭骨を有し、言語を使ふ活き物ではござりますが、決して頭骨ではござりません、亦決して言語ではござりません。

こうした坪井の言明からは、当時、西欧の人類学においても、人種 (race) の存在を文化 (言語) の視点から捉える見方が存在したことが窺えよう。しかもまた、坪井にとって、このような多様な人種分類の存在は、人種の実在性の

否定を意味していた。結局のところ、「人種とは如何なる方法かに拠つて分類した所の人類の一群」としか定義できず、「一つの人種と云ふもの、範圍は分類次第で廣くも成り狭くも成るので、極厳正に申せば、単に某の人民と某の人民とは同人種か別人種かと問ふのは意味の無い事」なのである（坪井一八九六・一〇五—一一〇）。

人種とは分類のための便宜的な単位にすぎないとする坪井の人種観は、他の論考中にも数多くみいだせる。例えば、「人類学と近接諸学との区分」（一八九六年）によれば、「人種学〔Ethnology〕¹⁾は人類を幾つかに小分けして何人種何人種と云ふ名を与へ、彼様に作り設けた諸人種の異同及び相互の關係を調べる事を勤め」とするが、「所謂人種と云ふものは人為の分類で有つて多少随意的のもの」であるため、人類学にとつては、あまり価値をもたない。坪井によれば、人類学の目的は「人類一般に関する諸事を説明する」ことにあり、それはあくまでも「完全なる人類其者についての学」でなければならぬのである（坪井一八九四・四二五—四二六）。

そして、このように人種分類が恣意的なものと考える限り、人種集団としての日本人の起源を探求することもそれほど重要な研究課題とはなりえない。自然人類学者を中心に日本人の起源に関する研究は現在でも盛んだが、ナシヨナリズムの高まりを背景に、明治二〇年代以降、言語学や歴史学の領域では「日本人種」の起源をめぐる著作が数多く発表されていた（工藤一九七九）。だが、坪井の「通俗講話人類学大意」（一八九三年）によれば、「世間で常に用ゐる日本人種、大和人種、天孫人種杯の人種なる語は人種学上、一定したる所の意義に従つて居るとは申せませんが、便宜上存して置く可きもの」でしかない（坪井一八九三・四二七）。こうした言明からは、坪井自身は、同時代の日本人種（大和人種、天孫人種）をめぐる議論から距離をとろうとしていたことがみてとれよう。

このように、人種を生物学的概念に限定されるものとは捉えず、むしろ人種分類の恣意性を強調する坪井の立場は、明治期の人種をめぐる語りのなかで例外的なものにみえるかもしれない。当時の日本では、すでにブルーメンバッハ（Johann Friedrich Blumenbach）による皮膚の色や頭骨の形状に基づく五大分類は教科書などで広く知られていたし、同じ人類学者でも、例えば小金井良精（東大医学部解剖学教授）は、「原始人類の話」（一九〇五年）と題する講演において、人類には「皮膚の色、毛の色、毛の多少、身長、身体各部の割合だとか、頭の形とか、顔貌」などに種々の違い

があり、この違いを人種と呼ぶとも語っていた（小金井一九二六・二二九—三三〇）。

だが、こうした事実をもって、すでに明治期、大部分の人間にとって人種は生物学的概念と理解されていたと結論づけるのは短絡的である。当時、白色人種（白種人種）、黄色人種といった皮膚の色に基づく呼称が広く用いられていたことは確かだが、その一方で、先に挙げた坪井の言明に登場する日本人種（大和人種、天孫人種）という言葉からも分かるように、現在の *racion* に相当する意味で人種が用いられることも珍しくなかった。例えば、人類学会の会員であった沼田 輔という人物が一九〇三（明治三三）年に発表した『日本人種新論』という著作では、「日本帝国臣民を組織する人種の起源を論究する」ことがうたわれている。だが、そこでいう日本人種とは、当時の「日本帝国臣民」のうち、アイヌと台湾住民（漢族および少数民族）を除く人々を指すにすぎず、日本人種（あるいは人種）が身体的特徴によって規定されているわけではない（沼田一九〇三）。こうした用法の存在は、明治期において、人種が、多義的な使用を許す、あえていえば「同じ種類の人」といった意味合いの言葉として用いられていたことを示している。例えば白色人種、黄色人種といった呼び方は、そうした人種の多様な用法の一つにすぎないし、一方、学会草創期からの有力者とはいえ、少なくとも明治期の人類学会では傍流に位置していた小金井の定義をもって当時の人類学者による代表的な人種理解とみなすこともできない。こうした状況下、坪井が人種分類の恣意性を強調したのは、彼が西欧における多様な人種（*Race*）分類の存在について知悉すると同時に、日本語における人種のはなはだ曖昧な用法に対して一線を画そうとしていたからと考えるべきだろう。

日本人種の浮上

そしてまた、坪井の人種観は、西欧における人種をめぐる言説への批判を含んでいた。例えば一九〇三（明治三六）年に発表された「人種談」において、坪井は「優等人種」と自らを誇る「欧羅巴人種」の自己認識を批判しつつ、人種相互の関係は「或は兄弟、或は従兄弟、再従兄弟」のようなものだと言主張する。人種に根本的な相違がない以上、「様々の境遇、或は社会の発達如何に依つては、其人種が劣等のものにもなり優等のものに成るので、決して人種の

優劣が運命として定まつて居るのでは無い」のである（坪井一九〇三・二六九―二七〇）。人種の根本的な分類不可能性と人類の普遍的共通性の強調は、人種概念がもつ政治性に対する抵抗の身振りにほかならない。社会進化論的発想が当然とされている時代にあつて、いやおうなく「欧羅巴人種」を頂点とした進化論的ヒエラルヒーへと組み込まれてしまふ人種という枠組みを拒否すること。ここには非西欧社会の人間が西欧からのオリエンタリズムに満ちた視線に抗する態度が看取できよう。

だが、坪井における人種概念への否定的評価は、その後の日本がたどつた歴史のなかで、そのままの形で堅持されることはなかった。日清、日露の二つの戦争を経て日本のナショナリズム／帝国主義が膨張していく過程で、日本人の人種的アイデンティティを明らかにすることへの社会的要請は確実に高まっていき、当初、人種や日本人種の実在性を否定していた坪井も、徐々に日本人種の起源についての語りを始めていくことになる。

例えば、一九〇八（明治四一）年には、坪井は「日本人種の起源」を直接の主題とした講演を行っている。坪井は、次のように述べることから講演を始めているが、ここに「我々」＝日本人種についての自負、自信の高まりをみいだしてもあながち間違いではあるまい。

日本に居る様々な種族と云ふものとそれから日本人種と云ふものとは別であると云ふことは今此席で申す必要はありませんので日本に居る様々の人種のことを申すのではない、中心に立つて重要な働を為して居る日本人種と云ふものだけに限つて申すのであります。（坪井一九〇八・一一二）

坪井は、この講演で、体格（外見）と風俗の両面から「日本人種の起源」について論じているが、彼によれば、日本人種のなかには「朝鮮地方の者によく似た者」「馬來地方の者に似た者」「アイヌ」に似た者」などがあり、現在の日本人は、これらの人種が混交してできたと考えられる。

集団としての日本人の形成を複数の人種の混交によって説明する発想は、いわゆる「お雇い外国人」に端を発する

が、坪井の死後、人類学者が日本人の起源をめぐる様々な学説を提唱する時代が本格的に始まり、そうした研究は、明治期の用法を踏襲して、長きにわたり日本人種論と呼ばれることになる。だが、人類学者が日本人の起源についての研究を進めていくためには、一つの問題が未解決のまま残されていた。それは、日本人という集団を括る日本人種、さらにはその前提となる人種という言葉がもつ曖昧さを排し、日本人を学問的に規定する新たな道を探るといふ課題にほかならない。

2 人種か民族か——日本人起源論と人種概念

人種と民族

坪井正五郎の人種や日本人種をめぐる語りは、草創期の人類学において日本語の人種が「race」と同様、必ずしも身体形質のみを指すとは考えられていなかったことを示しているが、それでは、人種と対比される日本語の民族という言葉は、いかなる経緯を経て生まれたものなのだろうか。

安田浩によれば、明治前半にほとんど使われることのなかった民族の使用が広がっていったのは、明治二〇年代初頭における雑誌『日本人』、新聞『日本』の刊行が大きな契機であった。これらの活字媒体は、国民主義、国粹主義を強く主張したが、そこでは「欧化主義を批判し、国民的発展の基準を伝統・歴史・文化に求めたがゆえに、伝統を継続して歴史的に担ってきた主体」として民族という言葉が打ち出されたのだという（安田一九九二：六一―七二）。また、山室信一は、現在の民族に該当するものとして明治前半に用いられていた民種、種族（属）といった言葉から人種と重なる種の字を省いたり、人民の種族の縮約として民族という言葉が鑄造されたのではないかと述べている（山室二〇〇一：一一二）。ここで、これらの指摘について検証する余裕はないが、安田らがいうように、民族という用語が明治中盤以降、普及したとするならば、その過程で人類学者も徐々に民族を使うようになったとみてよいだろう。

例えば、坪井の弟子である鳥居龍蔵が一九一〇（明治四三）年に発表した「人種の研究は如何なる方法によるべきや」では、「私自身の今日の立場は一般人類その者の研究ではなくして、むしろ人種とか民族とかの研究を主として居る」という表現で、民族という言葉を用いている。しかもまた、この論考では、「人類の研究と人種の研究とは全く別」だという認識のもと、現代の我々の理解に通じる人種の定義も示されている。鳥居によれば、「人類というのは、もと種 (Species) は一つでありまして、その種の中に幾らか変種バリエイターがある。この変種が人種レースというものである。

ただし、現代の我々とは異なり、鳥居は人種の研究が自然科学的方法によるものと考えているわけではない。鳥居によると、「人類の研究」である人類学が、他の動物と比較して人類の研究を行うため、「純然たるナツールヴィゼンシャフト〔自然科学〕」の上に立つのに対して、人種の研究は、結局のところ「レースおよびレース以下の者(Rassen)などといった下位分類単位」に向かつての歴史的研究をする」がゆえに、「クルツールヴィゼンシャフト〔文化科学〕」との関係が非常に強くなるという（鳥居一九七五・四七一―四八〇）。

日本人種から日本民族へ

それでは、人類学研究の領域において、人種Ⅱ生物学的／民族Ⅱ文化的という区分はいつ頃明確化してくるのだろうか。当然のことながら、論者によって人種および民族についての理解に違いがあるうえに、そもそも民族概念の人類学への導入は徐々に進化した現象であるため、はっきりとした時期を確定することはできない。だが、当初から歴史的・文化的意味合いを担わされた民族の使用が広がっていくにつれて、従来からある人種の生物学的概念への縮減、つまりは人種概念の「生物学化」が進行するとともに、人類学の学問分化も進んでいったと考えて間違いないだろう。そしてまた、人類学への民族概念の導入と、それにもなう人種と民族の区分の形成は、必然的に日本人の起源をめぐる議論を支えてきた日本人種という言葉の再考を迫ることになる。そこで、民族概念の登場が、日本人種論にかなる影響を与えたのかを考えるために、大正初頭、柳田國男によって刊行された雑誌『郷土研究』創刊号（一九一

三年)の巻頭論文に着目してみたい。「郷土研究の本領」と題するこの論考を書いたのは、柳田とともに雑誌を立ち上げ、日本における神話研究の先駆者としても知られる高木敏雄である。

高木の論考は、まず郷土研究の目的は「日本民族の民族生活の凡ての方面の凡ての現象の根本的研究」だと主張するが、ここで問題になるのは、では民族とは何か、日本民族とは一体どこまでを含み込むカテゴリーなのかということである。高木によれば、民族とは「相集つて一個の社会を組織する人間の有機的血液団体」であり、日本民族とは北海道のアイヌを除く列島の住民すべてを含む(ただし、沖縄の住民は日本民族中の一民族だと高木は捉える)。そして、これらの住民は「その言語に於て、その風習に於て、その信仰に於て、即ちその文化の凡ての方面に於て共通してゐる」と高木はいふ。

一方、高木は、日本民族の「人種問題」に関して「今のところでは何一つ断定的のことを云ふことが能ぬ」と述べる。高木によれば、「生物学上の概念」である人種と「歴史的概念」である民族ははつきりと区別されねばならぬ。そして、「日本人種の起源問題」について多くの学者が研究を進めているが、これらの研究には少なくとも三つの誤解がみいだせる。すなわち「人種と民族との概念の混同、人種の起源地に関する誤想、民族文化の研究と人種問題との関係に就ての偏見」が、常に日本人種の問題に付随して、この単純な問題を面倒なものにしているという。

先にみた坪井や鳥居とは異なり、この高木の言明では歴史や文化と結びついた民族に対して、人種は生物学的概念だと明確に規定されている。ただし、人種を「生物学上の概念」と捉える高木にあつても、日本人種や人種は仮構的なものにすぎない。高木によれば、人種という概念は「要するに甚だ漠然たるもの」であり、「民族の文化の研究」という観点からは日本人種の起源問題の解決は重要性をもたないのである(高木一九一三・二七)。

しかし、高木の批判にもかかわらず、民族と人種の区別が明確になることで、逆説的に日本人種論はその確固たる基盤を与えられることになる。先にみたように、坪井も世紀転換期から日本人の起源についての語りを始めていたが、そこでいう日本人種はどこか曖昧な存在でありつづけていた。人種という言葉の曖昧さは日本人種というカテゴリーの曖昧さにつながり、そこには常に日本人種の確定不可能性という問題がつきまとつていた。

だが、集団としての日本人を日本人種と呼ぶことをやめ、歴史や文化の面で共通性をもつ日本民族（大和民族）という統一体を指定すれば、こうした問題はとりあえず解消されるだろう。たとえ日本人が生物学的な意味における人種でなかったとしても、歴史や文化の面で高度の統一性をもつ集団であると考えれば、その生物学的な組成を含めて起源を問う研究は一応可能となるからである。⁽⁶⁾

むろん、日本人種と同様、日本民族（大和民族）という概念もまた、ナシヨナリズムと密接にかかわる形で生まれてきたものであり、歴史や文化を共通とする日本民族という発想自体、国民国家の産物である。人種にせよ民族にせよ、日本人という集団を括る絶対的基盤はありえない。

しかし、日本人を生物学的な意味での人種と捉えようとする試みは、必ず一つの困難に遭着せざるをえない。日本人が複数の人種の混血からなるとすれば、日本人を一つの人種と呼んでいいのかという疑問がすぐに生まれてしまうからである。

それに対し、歴史や文化の共通性に基づく民族の場合は、このような難点は顕在化しにくいだろう。近代国民国家は、たえず歴史や文化の共通性という物語を紡ぎ出すことで、自己の正当化をはかる存在にほかならない。たとえ歴史や文化を共有する国民／民族という觀念が虚構であったとしても、そうした虚構は、国民国家が有する様々な装置によって、一つの「真実」へと作り替えられていく。

日本人種から日本民族へ。これは単に言葉の変化にとどまらない影響を日本人種論にもたらした。本稿でくわしく論じる余裕はないが、日本人の歴史的・文化的統一性、あるいは民族としての一体性を前提に、大正期以降の日本人種論は展開することになる。⁽⁷⁾